

# 寿楽院寺報

〒369-1245 大里郡花園町荒川983

高野山真言宗 荒瀧 寿楽院

住職 高橋 敬行

電話 048-584-0302

## 彼岸・此岸について

仏教の考え方では、大きな川（三途の川）があつて、その川を渡る手前を彼岸、川を渡った所を彼岸と名付けています。この彼岸から向こう岸の彼岸に渡りなさいと教えているのが、仏教の基本です。

此岸のことをサンスクリット語では、「サハ」といいます。これは、苦しみに耐え忍んで生きる土地という意味です。「忍土」と訳します。この「サハ」に当

て字をしたものが「娑婆」です。娑婆というのは、忍ぶ土地のことなのです。娑婆の世界は、この世の苦しみや煩悩につきまとわれた世界です。我々はみんな、お互いに迷惑をかけあっているのです。

「あなたは人に迷惑をかけている。その迷惑を人から許されて生かされているのだ、だからあなたも人から迷惑をかけられても耐え忍びなさい」。そう教えるのが、仏教における宗教教育なのです。

逆に「人に迷惑をかけるな」という教育をすると、「私はそれほど迷惑をかけていないのに、あの人は迷惑ばかりかけている」と他人の糾弾ばかりする人間に育ってしまいます。ですからインド人のものの考え方、仏教の根底にあるのは、娑婆は忍土である。みんな耐え忍んで生きている。私たちがこの彼岸で耐え忍んで生きていくにはどうしたらいいかというところ、彼岸に渡って仏の世界の目で娑婆を見ることです。そのとき、人の迷惑を許せるようになり「私は迷惑をかけている」ということを発見できるようになるのです。

よく此岸が生きている世界で、彼岸が死後の世界と考える人がいます。真ん中に流れる川を三途の川と考えているものですが、お釈迦さまがいたかったのは、この世が此岸、この世から出た世界、つまり出世の世界（仏の眼で見る世界）が彼岸なのです。ですから生きている人も彼岸に行けるのです。じつは大切なのは、このこと、今の日本人は此岸からの見方だけが絶対になつてしまつています、それでは仏の子である人間は

救われません。そうではなく、向こう岸からほとけさまの目でこちらを眺める。そうした此岸の確立に向かおうというのが、仏教の教えなのです。仏教の教えの基本は、「向こう岸に渡れ」ということです。向こう岸に渡れということ、この世界を捨てよ」ということでもあります。（ひろさちや著より）



今年の夏に撮影した寿楽院の全景です。



平成十六年十一月十八日撮影



昭和18年頃、寿楽院庫裡の前でお針子達の記念写真です。中央に写っている寿楽院母堂も今年7月一周忌が過ぎたところです。庫裡前の坪庭が懐かしく思い出されます。この庫裡を屋根替えし、少し改造したのが現在のものです。

## 空海の言葉 シリーズ

### 師の恵果阿闍梨との出会い

弟子空海、桑梓を顧みれば東海東、行李を想えば難が中の難なり。

波瀾万々たり、雲山幾千ぞ。

来ること我が力に非ず、帰らんこと我が志に非ず。我を招くに鉤を以てし、我を引くに索を以てす。

これは、「大唐神都青龍寺故三朝の国師灌頂の阿闍梨恵果和尚の碑」のなかの一節である。

お大師様は延暦二三年（八四四）数え年三十一歳の時、大唐に留学され、翌年の春偶然にも長安の都（西安市）の青龍寺東塔院の恵果阿闍梨に会うことができた。すると阿闍梨は大変喜ばれて、「私は先にそなたが来ることを知って（予知して）、待っていること久しいものがある。今日会えて、本当によかった。この世の生命は尽きようとしているのに密教を本当に伝えるに足る人がいないので心配していた。必ず早く香華を準備して伝法の灌頂壇（如来の五智の法水を弟子の頃にそそぐ秘儀）に入るように」といわれた。初めて会って、この温かいお言葉をいただいたお大師様のお喜びと感激はいかばかりであったであろうか。こうして真言密教の秘法を受法することができたのである。そして阿闍梨は伝授が終わると問もなく、永貞元年（八〇五）二月二五日六〇歳で遷化（逝去）された。弟子三千人の中から、選ばれてお大師様が恵果阿闍梨の碑文を作り、それを筆で書くという名誉を得られた。

